

世評・時評

先日、後輩が母校同窓会支部の記念誌を送ってくれたので、お礼の電話をすると「アア頂きました？」と言われた。筆者は日本語の専門家ではないが、「頂く」は昔う、食べる等の丁寧な言い方で、この場合「アア頂きましたか？」とか「お受け取り頂けました？」と言うのが本当だと思ふ。

最近、難しい日本語の中でも難しい敬語・謙語・丁寧語の間違った使い方が多い。TVショッピングなどで多用される「用意とか御提供など、話し手が自分の行為に責任をおおつけけることが横行しているが、昔はこういう時に謙譲語の「申し上げます」をつけて相手に敬意を表した。

先日の臨時国会の初日初当選の衆院議員連が朝早くから国会議事堂の前で門が開くのを待っていた。門が開いた時某TVのリポーターが「新人議員たちは議事堂にお礼をして入って行きます」と報じたが、これは一礼の心算だったのだらう。お礼では意味が違う。以前、同窓会の会合で料理研究家の江上栄子さんと同席したので、料理には「揚げる」という用語があるから、切って上げるとか炒めて上げるのようなどかゆい方が紛らわしいと話ししたら、「地方の料理講習会に行くので前以てお礼の用意を頼んだら、当日、錦繡が用意されて通じない」と嘆いていた。言葉は文化の基本。英

右：高速下の日本橋
下：魚市場発祥地の像



写真・文 七海邦夫

東京江戸散歩

その拾五・日本橋・人形町①

日本の金融・商業の中心地日本橋から、下町風情が残る人形町までを歩くコース。オフィスビルや店舗が連なる街の片隅には江戸時代の名残も見られる。

地下鉄「三越前駅」B6出口を上がると、直ぐ前に徳川家康が五街道の基点に定めた日本橋がある。首都高速に覆われている現在の橋は十代目、明治四十四年（一九一一）築の石橋で、国の重要文化財にも指定されている。因みに江戸時代初期の橋は全長三十七間尺（約七十一、一メートル）

（約七、九メートル）、現在の全長四九、一メートル、幅二七、三メートルに比べると、江戸時代のほうが長く、幅は狭い。橋の柱にある「日本橋」の文字は徳川最後の将軍慶喜の筆によるものだ。橋を彩る獅子や麒麟の像は当時の美術学校の作。

東京駅から日本橋にかけての一带は江戸時代以前にはヨシなどが生い茂る湿地だった。ひなびた漁村だった江戸が変貌するのは天正十八年（一五九〇）の徳川家康の江戸入府がきっかけ。

家康は江戸の町の造成に着手、町割を開始した。神田山（駿河台）の台地を掘り崩した土で江戸城の東の湿地を埋め立て、そこにやがて商業地が形成されていった。そうした都市基盤づくりの中で幕府は平川を延長して運河に木の橋を架けた。コレが日本橋の始まりだ。

橋名の由来は「御府内備考」に「この橋、江戸語教育の前に、正しい日本語を教えて貰いたい。（やぶにらみ）」と記されている。この橋を起点として道路を発達させていこうという幕府の理念があった、それが日本橋と言う名称になったのだ。架設年代は明らかではないが、橋を起点に東海道などが慶長九年（一六〇四）に整備されているので、その前年には橋は完成していたのだらう。

毒舌・独言

我々人間は何処から来て、そして何処へ行くのだろうか？と考えたことがありませんか？

平均寿命が四十にも満たない時代に八十余歳まで生き続け、入滅直前まで「修行」と位置付けた釈迦は、全てを理解していったのだらう。だが、我々凡人には解る道理がない。ならばどうするか？ここが肝心の論旨である。人生を放り出すのか、何かに縋りつくのか、それとも自分なりの答えを探し続けるのか？私の言いつはこうである。「いつか死ぬまではジタバタしながら生きていこう。傍目にもっともなくても、死ぬ時に納得してオサラバしよう。」是非実現してみたい。（完）

◆編集委員会より
お願いです
「あおい通信」は、皆様からの原稿を募集しています。担当飯島迄お申し出ください。

パゲの旅

島口 和子

一九九三年八月九日
成田発：ロンドン：オス
ロー：ベルゲンに到着。
○市内観光
ハンザ同盟都市で栄え
た町で、港にそって切妻
屋根の木造家屋が並び、
お土産屋やレストランな
どに使われていました。
港で空中吊り（ハンジ
ージャンプ）を見まし
た。高見の見物なのでし
ょうか、吊る機械は日本
製でした。

○ギリクの家
海を臨む山荘風の白い
木造の家で、三九才から
六四才で亡くなる迄ここ
に住み数多く作品を残し
ました。御夫妻のお墓が

GRACE JACO

高井 辰知男

『田暮』の歴史や起源に
は諸説あるが、概ね四千
年前の古代中国が起源と
云われている。太古中国
に於いて、碁盤は易・占
いの道具として使われて
いたらしい。

碁盤には縦横十九路あ
り、その交わる点は三百
六十一ある。数の一は万
物生育の源として同じ意
を表す天元(碁盤の中央に
位置する点)に置き、残り
の三百六十を四等分して

道を下った岩場にあり下
はワイロルドです。
(註)ギリクは組曲「ペ
ールギェント」などで
知られるノールウェーの
作曲家

夕方には現地のガイド
さんの自宅に一行が招か
れ、高台に立つ山小屋風
の家で馳走になりました。
ご主人は日本人でし
た。十六年も昔の事で、
私もまだ健脚。心温まる
旅の思い出です。



ギリクの家



四隅に置き、春夏秋冬の
四季を現している。一隅
の敷九十は各季節の日数
と同じである。まだ文字
の無いころ暦代わりとし
て使い、盤面で天文を見
白黒の碁石で易を占った
という説がある。

田暮が遊びや賭け事の
様相を呈してきたのは、
唐の時代になってからだ
と考えられている。しか
し、田暮の奥深さは周知
のごとくで、単なる遊び
や賭け事の道具としてだ
けに留まらず、先人達は

私の文壇

橋本 摩子

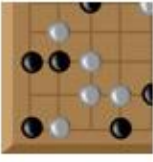
先日、交流会の為の歌
の練習で「故郷」を唄った。
スタッフの方が、「歌詞
の意味を味わって、その
情景を思い浮かべ心をこめ
て唄いましょう。」と云わ
れた。「兎追いしかの山、
子附約りしかの川：(中
略)如何に居ります父母、
恙なしや友がき、雨に：
(後略)」

なき父母、故郷に暮ら
す友や兄姉のことを考え
乍ら唄っているうちに、
涙がこみ上げて唄えなく
なかってしまった。

今迄こんな経験したこと
とはなかったのに。哀し
い歌、楽しい歌、それぞ
れに情感をこめて唄うこ
との大切さを気付かせら
れた一時であった。

さて私の故郷はどのう
と、埼玉県は秩父郡横瀬
町、かの雄大な武甲山の
麓にある町。だが、私の
育つ頃はまだ横瀬村で、

田暮の直髄を極めるべく
努力してきたのである。
現代においても、これ
から先も人を魅了し続け、
更に進化していくことは
間違いない。(つづく)



村社が御嶽神社といつて
武甲山の頂上にあり、村
里には里宮として今も麓
の近くに古い社と神楽殿
がある。五月一日が例大
祭で、毎年多数の人が登
山する。

当時は必勝祈願の為、
小学生も高学年になると
半強制的に登らされた。
私も三回は登っている。
低学年の時は里宮の方
へお詣りした。子供の足
には片道一時間半の田舎
道であったと思う。

毎日の通学路は田んぼ
の中の凸凹道で人家もま
ばらだった。道端のタン
ポポや土筆を採り、イナ
ゴが跳べばそれを捕まえ、
桑の実が色付けば類はり、
野菊が咲けば摘み、薄の
葉で指を切ったり、と道
草し乍らの通学だった。
雪の降る日は、下駄に

私の人生

今 カの子

父の仕事で、遠い異国
中国で終戦を迎え、波乱
の半世紀をくぐり生きて
きてきました。

思い起こせば貧困な生
活、大根飯にミソを舐
めても、「ソナチモンカ」
と疑いもせず、元気に過
してました。今は贅沢
なんでしょうか？
主人に先立たれ、仕事、
子育てに必死だった日々
ようやく離れ、これ

張り付く雪を蹴落とし滑
ったり転んだりしない様
めやっとな家に辿り着く。
戦争末期に小学生だっ
た私は、「節約・我慢」の
世の中を決して辛いとは思
わなかった。大した玩具
や本もなく、天気さえよ
ければ外で遊んだ。

縄跳び、石蹴り、かく
れんぼ。凄いのでは丸太の
山登り。薪の材料として
裏山から切り出された二
メートル位の雑木が庭先
に積まれて、高さも二メ
ートル位。その山によじ
登って眺める武甲山、夕
日に染まる武甲山は殊の
外美しかった。木の上の



から少しゆとりのある人
生をと思ったのも束の間、
病魔に取付かれ、気落ち
した毎日を過してしまし
た。

しかし、薬にお世話に
なって一年も過ぎ、今は
スタッフの方々やお仲間
に恵まれ、リハビリを楽
しみにしている今日この
頃です。幸い、皆さんの
助けを借りて、少しずつ
ですが前進している気が
しています。明るく楽し
くりハビリを頑張って、
自分の足で力強く大地を
踏みしめたいと思ってい
ます。

恋さも冬の寒さも忘れて
感動した。
戦後六十年余、世の中
は全く変わってしまった。
あの武甲山さえ昔の美し
い雄大さは薄れた。
セメントの原料として
石灰岩が削り取られ、山
頂近くは台地の如くなり、
山肌が白く現れ見るも痛
ましい姿。それでも尚、
私はかの武甲山を懐しく
誇りに思う。

お仲間へ
高畑 優子



薬の一角となり早二ヶ月
あまり、キッチンを担当
させていたいただき、利用
者様からの「おいしかっ
たヨ」の言葉に励まされ
日々頑張っております。
出身は、豪雪地帯の秋
田県湯沢市です。

今私は、生協仲間十三
人で「せいかつ畑」とい
う会を作り、食の安全、
食育などについて皆で考
え学んでいます。

あおい「歌壇」

泉 直子

あかどきの
朝日の昇る一時を
足止めて見つ
散歩の途中
爽ひむがしの
空金色に今のぼる
朝日に向ひ
掌を合わせけり
相田美代子

みかん吊る
庭の紅葉に
飛び来たる
夫婦(めおと)
目の可愛い仕事
夫婦(ふたり)して
月を眺めて語らえば
昔のことに
話はずきぬ

薬友の会

十月のイベント報告

十六日(金)「カラオケ
会」は十八名参加の盛況
でほぼ満席でした。
二十八日(水)の「グ
ルメ兼歩く会」も晴天の
下、二十一名参加で「小
石川後楽園」とドームホ
テルの「たん熊」を堪能
しました。

